

未来世療法の中のイエス（人生学 第19回）

高橋清隆

はじめに

ブライアン・L・ワイズ著、山川紘矢・亜希子訳『未来世療法 運命は変えられる』（PHP、2005年6月22日、原題は『Same Soul, Many Bodies』、副題は「Discover The Healing Power of Future Lives Through Progression Therapy」）は、『前世療法』等で有名なワイズさんの著書の中でも、特に印象的な本になっています。他の著書では、概して、悩み等をかかえている患者や相談者、セミナーの参加者に、前世を体験させることにより、その悩みや病気を軽減させたり、人生の意義を伝えたりすることが多いのですが、『未来世療法』では、前世に加えて、未来世も体験するというのが特徴になっています。

考えてみると、時間というのは、この世での仮定のものであり、あの世ではすべての時間が存在する、すなわち、この世のような時間の流れはないというのが、あの世を知る人たちの一致した見解です。

しかし、未来は確定しているわけではなく、この世で生きている人がどのように考え、どのように行動するかによって、未来もまた変わってくるということが、『未来世療法』の中で述べられています。

さて、ここではそのいくつかに分かれている未来に焦点を当てるのではなく、ワイズさんのワークショップに参加した、ビクトリアさんの過去生を採り上げます。そこには、イエス・キリストさんが登場するのです。それを、ビクトリアさんの空想の産物だと捉える人がいるかもしれません。

けれども、ビクトリアさんの過去生（前世）の話は、私たちの人生の諸問題に関わる事柄が少なからず含まれているのです。

1 ビクトリアさんの現世と過去世

まず、ビクトリアさんについて、『未来世療法』によって紹介しておきましょう。

「ビクトリアは地獄のように苦しいガンにかかっていた。」(61ページ)とまず提示されます。そのあとに、経歴や、ワークショップに参加した経緯が簡単に述べられます。

ビクトリアはマンハッタンに住む物理学者で、有名な芸術科学アカデミーの会員です。オメガ・インスティテュートで行なわれた五日間のワークショップの初日に、彼女が私のところにやって来た時、私（引用者注、ブライアン・L・ワイズ博士）は初めて彼女に会いました。オメガ・インス

ティチュートはニューヨーク州ラインバックにある、ヒーリングとスピリチュアルな学びのためのセンターです。この十六年間、ガンのためにひどい腰痛に苦しんでいると、彼女は言いました。何回も手術し、抗ガン剤治療と放射線治療をしたにもかかわらず、治らないとのことでした。そして、何センチもの厚さの病気に関するカルテを私に手渡しました。痛みは絶え間なく続いていました。まるで歯茎が膿んだ時のように、容赦なく襲いかかってくるのだと、彼女は説明しました。夜はモルヒネに似た薬を何度も飲まなければなりませんでした。それほど、痛みがひどかったのです。でも、日中ははっきりした頭脳で仕事が続けられるように、苦痛をがまんしていました。まだ五十代中頃なのに、彼女の髪は痛みでまっ白になっていました。それが嫌で、彼女は髪を黒く染めていました。(61～62ページ)

このような辛い症状は、精神世界では、偶然とは考えません。その原因と思われる出来事が、ビクトリアさんの過去生として紹介されます。

彼女は五日間、すべてに出席しました。そして最後の日、報告書を持って私のところにやって来ました。その報告があまりにもすばらしかったので、他の人々に読んでもいいかと、私は彼女にたずねました。その五日間に、彼女は何回か過去生に、それもイエスの時代のエルサレム近郊で起こった過去生へと戻る体験をしたのです。彼女は貧しい農夫で、大きな腕と肩を持つ、たくましい男でした。しかも、霊的に敏感で、鳥や動物を愛していました。彼は道ばたの木の家に妻と娘と一緒に、誰の邪魔もせずに暮らしていました。ビクトリアは娘が誰かわかりました。彼女は今の人生でも、ビクトリアの娘でした。ある日、男は翼が折れて鳴いているハトを見つけ、ひざまずいて介抱しようしました。王宮警護のエリート軍団と一緒に行進してきた一人のローマ兵が、この男が自分たちの行く手をふさいでいるのを怒って、彼の背中を肋骨が何本も折れるほど、ひどく蹴りつけました。軍隊の他の男たちの彼の家に火をつけ、妻と娘を殺してしまったのです。残虐なローマ兵に対する恨みと憎しみが彼の中で赤々と燃えさかりました。その時から、彼は誰も信じなくなりました。彼の背中の中の傷はいっこうに治りませんでした。(62～63ページ)

『未来世療法』の中では、その過去世が、ビクトリアさんのガンの原因だとは書かれていません。けれども、今の人生で、特定の原因が見当たらないとすれば、その過去世の理不尽な出来事が原因だとは考えられないでしょうか。

2 心と病気との関係

前節で紹介したエピソードの中で、ビクトリアさんの過去生の男性に危害を加えたり、妻子を殺害した者たちが、後の生まれ変わりにおいて、病気で苦しんでいるのなら納得できます。ところが、何も悪いことをしていず、一方的にひどい目に遭わされた男性が生まれ変わって病に苦しむという

のは、何だか割に合わないような気がするの、私だけではないでしょう。

ここでのローマ兵の未来世はたどられていないので、その後、どんな生まれ変わりをしていたかについてはわかりませんが、因果応報により、自分のしたことを、学ぶまで何度も受け取ったことはほぼ確実です。実際、ワイスさんの他の著作の中に、過去世で他人に危害を加えた人の話も出てきて、何事もなく帳消しにされることがないことがわかります。

ここでは、それはさておき、理不尽とも思えるビクトリアさんの過去生での出来事を、どう捉えればいいのでしょうか。

まず、一つのヒントは、エドガー・ケイシー（1877～1945）さんのリーディングの中に見つかります。エドガー・ケイシー文庫031、林陽編訳『エドガー・ケイシー名言集 知恵の宝庫』（中央アート出版社、2006年2月10日）に、次の3点のリーディングの言葉があります。

352 建設的な考え方を保ちなさい。思いは感情に影響するだけでなく、消化吸収にも影響します。

怒りや悪意は体に毒を生産して蓄積します。常に朗らかでありなさい。23-3

353 悪意をもってはなりません。悪意は争いしか生みません。怒りを抱いてはなりません。怒りは心身を混乱させるだけです。1402-2

354 怒りを爆発させてはなりません。口に出しても、出さなくても、他をののしってはなりません。激怒は悪いものを食べるよりも多くの毒を作り出すからです。470-37

(143ページ)

言葉の末尾に書かれている23-3などの数字の前半は、リーディングに訪れた人を示す番号、後半は何回目のリーディングかをあらわす番号です。

これは、ビクトリアさんの過去世の男性にとっては、酷な言葉のように思えます。肉体に危害を加えられたのみならず、妻と娘を放火で殺され、それでも憎むな、怒るなというのには無理があります。

けれども、それは、ビクトリアさんの過去生が、この世に持ってきた重い宿題であったのでしょう。この重い課題を何回も生まれ変わっていくことによって、少しずつこなしていくという計画を立てたのだと思います。

さて、一般論として、仮に自分が悪くなく、一方的に相手が悪い場合でも、怒りは体を蝕みます。むしろ、自分も悪い方が、救いがあるかもしれません。自分も悪かったと思うことにより、怒りが少しは鎮まるからです。怒りに燃えている時には、食欲もないし、無理に食べると消化不良を起こすことがあるのは、多くの人が体験していることだと思います。

ビクトリアさんの過去生の男性の背中への傷がいっこうに治らなかったのは、私は、怒りによるものが大きかったと考えます。

3 イエシとの出会い

この題の「イエシ」は誤植ではありません。64ページの注に「ビクトリアは彼のことをイエシと呼びました。アラム語でイエシュアの愛称です。私たちにはギリシャ語でのイエスとして知られています。ビクトリアは退行中にはじめてイエシという名を聞いたのでした。」とあります。

さて、傷を負い、妻子を殺された男性はイエス・キリストさんと出会うことになります。

肉体的にも精神的にもボロボロになって絶望した男は、エルサレムの城壁の中にある神殿の近くに移り、掘立て小屋に住み、自分で作った野菜で辛うじて命をつなぎました。頑丈な木の杖か、唯一の家畜であるロバに頼って歩くことができるだけで、働くことはできませんでした。人々は彼をおいぼれだと思っていたのですが、ただひどく打ちひしがれているだけでした。ある時、ヒーラーとして有名になりつつあるラビの情報が、彼の注意を引きました。そして、男はこの人物の説教を聞くために——それは山上の垂訓でした——、ずっと遠くまで旅をしました。癒されるだろう、なぐさめられるだろうとは少しも期待してはいませんでしたが、やはり好奇心があったからでした。ラビの弟子たちはこの男の姿にぎょっとして、彼を追い払いました。彼はヤブの後ろに隠れましたが、イエシと目を合わせることができました。「まるで、無限の慈悲がこもった底無しの光を見ているようでした」とビクトリアは言いました。

イエシュアは男に言いました。「私の近くに来てもいいのですよ」男はその日ずっと、彼の言葉に従いました。

この出会いは、男に癒しではなく、希望をもたらしました。

彼はラビの説教に心をゆすぶられて、自分の掘立て小屋に戻りました。ラビの言葉は彼にとって、「鳴りひびく真実」であったのです。(63～64ページ)

人は、物事が調子よく運んでいる時には、あまり人生のことを深く考えないのかもしれませんが。この男性のように、何かにひどく苦しんでいるような時のほうが、人生の真実を求めたくなるように思います。もし、この男性が恵まれている環境だったなら、イエスさんの話を聞きに行きたいとは考えなかったのかもしれませんが。辛い設定ではあるけれど、イエスさんの話を聞きたいというエネルギーが残っていたのは幸いだったと思えます。

4 勇気とつながりと

イエスさんと、ビクトリアさんの過去生の男性とは、一般的な意味合いでは、親しい交流があったとは言えません。次に引用する部分が、この2人がいちばん関わり合った場面です。

ラビがエルサレムに戻って来ると聞いて、男は不安に駆られました。イエシュアが危険な状況に

あることを知っていたからです。憎らしいローマ兵が何をたくらんでいるか、噂を耳にしていたのです。忠告するために彼はラビのところに行こうとしましたが、遅すぎました。次に二人が言葉を交わしたのは、イエシュアが十字架にかけられるために、巨大な木柱の重みに苦しんでいる時でした。彼はひどく喉がかわいていることに、男は気がつきました。自分の勇気にびっくりしながら、彼は口をしめらすために水に浸した布を手にして、イエシュアに近づきました。しかし、イエシュアはすでに通りすぎていました。男はみじめな気持ちになりましたが、その時、イエシュアが彼を振り返りました。その目は、肉体的な苦痛と渇きと疲労にもかかわらず、無限のいつくしみをたたえていました。イエシュアは何も言いませんでしたが、男は心の中にテレパシーで伝えられた彼の言葉に気がつきました。

「大丈夫ですよ。これはあるべきようになっているのです」

イエシュアは歩き続けました。男は十字架刑の行なわれるカルバリの丘まで彼のあとをついて行きました。(64～65ページ)

一般的には、このあとの場面の方が感動的なのかもしれませんが、この場面の方が、私にとっては、いろいろと考えるところがあるのです。

ここで、テレパシーで伝えられたと引用文中にあるように、イエスさんと男性とは直接には話ができていません。テレパシーなど、思い込みではないのかと思う人もいるのかもしれませんが。そして、これは関わり合いなどにはなっていないと思う人も少なくないのではないかと思います。

この男性がおこなったことは、実質的には何の役にも立ちませんでした。忠告は、遅すぎてできなかったし、イエスさんに水をあげようとしたにもかかわらず、通りすぎていました。間が悪い人のすることは、こういうことが多いのです。

けれども、不自由な体で、しかも、忠告したり、水をあげようとしたりすると、仲間とみなされ、捕まることも懸念された状況において、こうした行動に出たことは、自分でも「勇気」と感じられたのだと思います。

どうせ無駄だからと行動しないことより、無駄でもいいから行動することを、エドガー・ケイシーさんはリーディングで推奨しています。

ビクトリアの過去世の男性の気持ちは、イエスさんに伝わったのだと思います。

5 奇跡

次に描かれるのが奇跡物語です。

ビクトリアが次に思い出したのは、イエシュアが十字架上で息絶えた数分後、しのつく雨の中で一人ですすり泣きながら立っている男の姿でした。家族が殺されたあと、彼が信頼できたただ一人の人物がイエシュアでした。それが今、そのラビもまた、亡くなったのです。突然、(ビクトリア

によれば)彼は「電気」を頭のでっぺんに感じました。それは彼の脊柱を貫き下りました。そして、彼は背中がまっすぐになったことに気がつきました。もう、背中が曲がってもいなければ、足もなえていませんでした。彼はまた頑強な男に戻ったのでした。

「見て下さい！」とビクトリアが叫びました。「ほら、見て！」

彼女は腰をまわしてダンスを踊り始めました。痛みはまったくありませんでした。男がまっすぐに立てた時には、誰一人目撃者はいませんでした。二千年後、ワークショップにいた全員が、ビクトリアのダンスを見守っていました。泣いている人もいました。私の目も涙で一杯でした。治療の記録を読み返す時、私は時には退行がもたらす神秘や畏敬の念を忘れてしまっていることもあります。でも今、その感覚がはっきりとよみがえっていました。これは催眠による暗示ではありません。彼女が深刻な脊柱の損傷を持ち、軟骨を失っていることは、MRIや他の検査によって明らかだったのです。(65ページ)

イエスさんの時代の男性の体が治ったというのなら、それは、空想なり、願望ということで片付けられるのかもしれませんが。

しかし、過去世の男性の脊柱が治った時に立ち戻った時、現世のビクトリアの脊柱も瞬時に治ったというのは、通常では説明が付きません。

「これは予定されたことです」とイエスは彼女に言いました。この言葉はとても重要だと感じますが、どのように解釈すべきか、よくわかりません。(69ページ)

ワイスさんは、正直に「どのように解釈すべきか、よくわかりません」と述べています。

6 死のまぎわに見る夢

精神世界では、生まれる前に自分の人生を定めてくるというのがほぼ常識ですが、精神世界以外のところでは、なかなか受け入れ難いことかもしれません。精神世界関係以外の本で、それについて述べているものがあつたので、採り上げたいと思います。ケリー・バルクリー、パトリシア・バルクリー著者夫妻は、精神世界系の人ではなく、『死のまぎわに見る夢』(秋田恭子・木村和喜子訳、講談社、2006年12月14日)の題のように、病気で死が近づいた患者が見た夢によって考え方などが変化した例を集めたものです。生まれ変わりや死後の世界について殊更言及してはしません。

そこから、ジムの例を引用します。

ジムはビジネスマンとして、また地域のリーダーとして成功した特権階級の男性でした。しかし、人生の絶頂期を迎えたと感じていた五二歳でガンに倒れ、余命が少ないことを宣告されました。彼は、人生のコントロールをうばった過酷な運命に怒り、絶え間ない恐れと動揺に苛まれていました。

夫の怒りのはげ口となり、自分もおかしくなりそうだった妻のヘレンが、ホスピスの紹介でわたしを訪ねてきました。彼女によれば、ジムが不思議な夢を見ているとのことでした。

はじめて会ったとき、ジムは顔色が悪く、かろうじて話ができる、という状態でした。ゆっくりささやくような声で、彼は夢について途切れ途切れに話してくれました。

〔末期ガンの五二歳男性が見た夢〕

わたしはまだ子どもで、西海岸北西部の町にある母校の校庭にいた。何人かの子どもたちと輪になって、子どものころよくやっていた遊戯をしていた。近寄ったり離れたりしながらのステップが続くうちに、さまざまな色のリボンがつながって、模様を作っているようなイメージが見えてきた。

わたしはジムにリボンについてたずねましたが、彼は質問には答えず、次のような言葉を返してきました。

「結局、人にはあらかじめ決められた運命というものがあるのでしょうか？ ぼくはずっと信じていなかったけれど、はじめからあったのですね」

その後しばらくの間沈黙が続き、そしてまた口を開きました。

「ぼくたちは、お互いがお互いの一部なのです。それ以外のもの、人生の成功や地位や名誉などは、何の関係もないのですね」（114～115ページ）

これは驚くべき言葉です。誰に教わったわけではなく、自分が見た夢で、人生の重要な部分がわかってしまったのです。

なお、この文章を読んでしばらくして、テレビを見ていたら、山口薫という画家の絶筆「おぼろ月に輪舞する子供達」が放映されて、そのシンクロシティに驚きました。リボンは描かれていませんが、この画家も死が近づいた頃に同様の夢を見たのかもしれない。「山口薫」「絶筆」で検索すれば出ると思います。

7 人生のリボン

ジムは答えませんでした。「リボン」「模様を作っている」「あらかじめ決められた運命」というのは、生まれる前の会議で打ち合わせしてきた、出会いであり、それぞれの人の役割です。仲のよい役割を演じる人もいれば、悪役、敵役もいるわけです。その人がそれまでの生まれ変わりでおこなってきたことにより、学びを定めるのですが、学びのためには他の人が欠かせません。そして、他の登場人物もそれぞれに自分の学びがあるので、人生の物語は、リボンが絡み合うように複雑になっているのです。人生の成功や地位や名誉は、初めから設定してきたものであり、努力で勝ち得たものではないのです。人生の目的はそれらではなく、体験し味わい学ぶことです。

ジムのおこなってきたことは無駄だったのでしょうか。成功など求めずに、何かの修行をすればよかったのでしょうか。

そうではありません。地域のリーダーとして成功した特権階級になることも、一つの学びです。それそのものは価値のあるものではありませんが、そこで体験したことは貴重な学びになっていくのです。

ビクトリアさんの過去世に出てくるローマ兵も、やはり学びの中にいます。ワイスさんは、バランスということの時折述べます。ローマ兵は、今度は、される側の体験を何度かするのでしょう。なぜ、そんな体験をしなければならないのかと思うような人生を、何度か体験することになるのでしょうか。それが、美輪明宏さんによれば、正負の法則であり、ワイスさんによればバランスなのです。

あの世では、辛いこと、孤独、悲しみなどは体験できないそうです。それらをこの世で体験するのは、貴重なことらしいのです。けれども、そのようなマイナスを体験して終わりではなく、それによって、あたたかいこと、一つであることのすばらしさを理解するようです。

8 予定されたこと

ビクトリアさんと、ワイスさんとの経緯を最後に引用したいと思います。

私（引用者注、ワイス博士）は彼女（同、ビクトリアさん）にこれからも連絡してほしいと頼みました。今、私たちは定期的に話し合っています。彼女は今もまだ、痛みを感じずに動くことができ、また、腰を巧みにまわすことができます。美容院に行った時、あまりにも染めた髪の毛の持ちがよいのに、美容師の男性がびっくりしたそうです。そのあと、実は髪が元の黒髪に戻ったことに気がつきました。医者は彼女が痛みなしに歩き、躍ることができるようになって、「びっくり仰天」したそうです。十月になると、薬局から彼女のところへ電話がかかりました。痛み止めの処方箋が更新されていないからでした。

「もう必要ありません」と彼女は答えました。そして、起こったことすべてに改めて感動して、泣き出したのでした。「私はよくなったのです」（69ページ）

「これは予定されたことです」とイエスさんは彼女に言ったのですが、これは、ビクトリアさんの学びのために予定されていたことなのです。

私たちの学びは、何回もの生まれ変わりを通しておこなわれることも少なくありません。イエスさんが教えた、人をさばくなとか、あなたの敵を愛しなさいというのは、大変深い意味を持っているのです。

ここで大切なのは、奇跡をおこなったイエスさんはすばらしいということではありません。ビクトリアさんが、イエスさんの教えを理解し、怒りや憎しみを手放した時に、自分の体も治ったという学びなのです。その学びが予定どおりだったのです。

ビクトリアさんの過去世の男性の時、一度治ったのですが、起こった出来事が出来事だったため

に、その怒りと憎しみはすさまじいものだったと思います。誰もそれを咎められないほどのものだったのは理解できると思います。現代の物理学者のビクトリアさんが、イエスさんの助けを借りて、自分で自分に起こした奇跡を再体験することにより、ビクトリアさんは、実に大きな学びを体験したのです。

先に引用した『知恵の宝庫』に次のようにあります。

283 多くの場合、つらいことがらが、魂の成長を大きく助けているものです。3209-1

285 多くを得ようとする人は苦しみます。しかし、創造的力との関係をいっそう理解し、その力を建設的に用いる人は、どんな経験も成長へ転換できます。5242-1

286 人は苦しみを通して理解に開かれるものです。しかし、自我を満たすだけの苦しみは裁かれます。204-1

288 苦しみや、試練、誘惑からも学び取れるのです。同じ立場にいる他人を批判しなければ、それは成長へと転換する力にさえなります。262-116

(115～116ページ)

286や288にあるように、何でも苦しめばいいというわけではありませんが、理不尽な苦しみが学びの過程にあるというのは、小林正観さんも述べていることです。

結論として、ブライアン・L・ワイス、エイミー・E・ワイス著、山川紘矢・亜希子訳『ワイス博士の奇跡は起こる』（PHP文庫、2015年1月21日。2013年1月、PHP研究所より刊行された『奇跡が起こる前世療法』の改題）の中にある、ナサニエル・ピーターソンさんの言葉を引用します。

私の痛みは去りました。愛は癒すことができるのです。最近痛みのある時など、まったく記憶にありませんでした。過去世退行中に体験した安堵感を説明することはできません。

憎しみはどのように感じられるか、知っていますか？ 肩の上に五千キログラム、乗せているような感じです。人に批判されたり人を批判したりする度に、さらに一キロが付け加えられ、私たちはついに身体が重くなりすぎて動けなくなります。世界が私たちの上に乗せている重さのことを思うと、この意味がわかるでしょう。それでもなお、私は自分が人生でどれほどの重さを担ってきたか、気づいていませんでした。それにすっかり慣れきっていたのです。ワークショップのその日、それは消滅しました。私は舞いあがりました。もう私を下に縛りつけてくものがなくなったからです。そして飛ぶために私たちは何一つ、特別なことをする必要はありません。ただ、自分の憎しみの存在から、愛の存在へと変えればよいのです。これ以上簡単ですぐにできることはありません。幸せと自由への鍵はずっと私たちの手の中にあったのです。

私たちの身体はとてもデリケートで、痛み、歳をとり、死にます。身体を持つということは、苦しみを持つことなのです。身体はとても大切です。なぜならば、私たちは身体の中に入って、この

惑星へ学びにやってくるからです。しかし、そのプロセスでは大きな苦痛があります。一度、身体を捨てると、私たちは自分が想像もできなかったほど大きな存在であることに気づきます。

(650～651ページ)

この末尾の言葉は重要です。神や、イエスさんが救ってくれるのではなく、私たちが、自分が愛の存在であることに気づくことが大切なのであり、それが学びであり、救いであるのです。

私たちは、さまざまな出来事の中で、他人を憎み、自分を憎み、なぜ神は救ってくれないのかと文句を言ったりもします。ビクトリアさんの過去世の男性など、そのような文句を言ってもやむを得ないだろうと思われることもしばしば起こります。

しかし、そこからの学びは大きいのです。さまざまな出来事は教材なのです。

イエスさんが、予定されたことだと言ったのは、自分が奇跡を起こして救うことについてではなく、ビクトリアさんが、時間割どおりに学んだということなのです。

学校に時間割があるように、誰にでも固有の学びの時間割があるのです。